

高校生の心理的ストレス過程に関する研究：

IV. ネガティブな情動と逸脱行動

古 屋 健・音 山 若 穂・坂 田 成 輝

Psychological stress process of high school students :

IV. Negative emotions and deviate behaviors.

Takeshi FURUYA, Wakaho OTOYAMA, Shigeki SAKATA

高校生の心理的ストレス過程に関する研究：

IV. ネガティブな情動と逸脱行動

古 屋 健

群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー専攻

音 山 若 穂

郡山女子大学短期大学部

坂 田 成 輝

早稲田大学

(2008年10月1日受理)

Psychological stress process of high school students :

IV. Negative emotions and deviate behaviors.

Takeshi FURUYA¹⁾

Wakaho OTOYAMA²⁾

Shigeki SAKATA³⁾

1) *Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University*

2) *Koriyama Women's Collage*

3) *Waseda University*

(Accepted on October 1st, 2008)

I. 問 題

われわれはこれまで高校生の心理的ストレス過程について検討を加え、研究Iでは心理的ストレス反応の構造を分析し(音山・古屋・坂田, 2006)、研究IIでは心理社会的ストレスを明らかにしてきた(古屋・佐々木・音山・坂田, 2007)。その成果を踏まえ、研究IIIでは、高校生の間に見られるさまざまな問題行動と心理的ストレスとの関係を検討した(古屋・音山・坂田, 2008)。その結果、引きこもり傾向、学校嫌悪、攻撃行動はネガティブな情動反応の高さ、ポジティブな情動反応の低さと関係し、心理的ストレスに伴う二次反応として理解できることが示唆された。その一方で、万引きや喫煙・飲酒等の逸脱行動については、ストレスとの関連は認

められたものの、情動反応の間には有意な関連が認められなかった。しかし、逸脱行動には心理的ストレス過程が関与していることを示唆する事実や理論があることから、本研究では研究IIIとは異なる資料を利用し、改めて逸脱行動とストレスとの関連について検討を加えた。

非行とストレス

平成16年から平成17年にかけて、我が国では児童生徒が加害者となった重大事件が立て続けに起こった。それに対応するため、文部科学省では「児童生徒の問題行動に関するプロジェクトチーム」を発足させ、16年10月には再発防止に向けた「児童生徒の問題行動対策重点プログラム」(文部科学省, 2004)を、翌平成17年には「新・児童生徒の問題行

動対策重点プログラム」(文部科学省, 2005)をまとめた。そこでは、一連の事件を分析する中から見いだされた問題として、「これらの子どもは、例えば学校内の友人関係や家族関係に起因するストレスなど様々な形で心にストレスを溜め込んでいるが、それぞれ周囲に何らかの形で前兆を見せていると思われること」、そして「自分の中のストレスを溜め込まずに誰かに相談したり自分の気持ちを的確に表現できるようなコミュニケーション能力又は対人関係能力が必ずしも十分でないように見受けられること」を指摘している。このような問題認識は具体的な対応策にも反映され、取組の柱のひとつである「学校で安心して学習できる環境作りの一層の推進」では、その一環として「子ども達が自分の中にストレスを溜め込まないように、気軽に他者に相談できるような学校内外の相談体制の整備を図ること」が上げられている。

報道等を通じて得られる情報からも、分析されたケースの加害者となった生徒の多くはいじめ被害、家族内のトラブル、厳しいしつけ等、友人関係や家族関係において日頃から大きなストレスを抱えていたことが推測される。そのようなケースでは、ストレスの原因に対して早期に適切な対応がとられていれば、事件の発生を未然に防ぐことができたとも考えられる。したがって、重大な少年非行事件の原因のひとつとして学校生活や家庭生活で経験するストレスの問題があるとする指摘は十分な妥当性を持っていると言える。

これ以前にも、平成12年、バスジャック事件をはじめとする一連の重大事件で犯人となった少年たちがそろって17歳であったことから、「十七歳問題」として社会の注目を集めたことがある。17歳が問題になったことは決して偶然ではない。平成18年度青少年白書(内閣府, 2007)によると、刑法犯少年の年齢別比率では16歳が最も多く23.1%、15歳で22.1%、17歳で15.8%となっており、15~17歳の高校生に当たる年齢層だけで6割を占めている。学職別比率でも高校生が42.4%で最も多く、中学生は27.9%である。つまり、17歳に限定はできないものの、17歳までの数年間が非行のピークであることは

統計的にも明らかであり、その意味で、「十七歳問題」は確かに存在している。

このような社会を騒がせる少年事件が起これば、教育や処遇の在り方も含め、その原因や対策についてさまざまな議論が繰り返されるが、個々のケースの事情を過度に一般化し、問題を起こした少年たちに見られた家族関係や友人関係の特徴が全ての非行少年にあてはまると考えるのは危険である。統計的に高頻度で生じている非行は、世間を騒がせるような重大事件とはまったく異なっている。たとえば、青少年白書(内閣府, 2007)によれば、刑法犯少年の罪種別比率では初発型非行(万引き、自転車盗、オートバイ盗及び占有離脱物横領)だけで73.3%を占める。また、最近の特徴として街頭犯罪(路上強盗、ひったくり、車上ねらい、部品ねらい、自動販売機ねらい、自動車盗、オートバイ盗、自転車盗の8罪種)が注目され59.5%と高い比率を示しているが、このタイプの事件も大きく報道されるような非行ではない。

重大な少年犯罪が起これば、非行が凶悪化しているかのような印象を受ける。しかし、非行が増加あるいは凶悪化しているかどうかは、どの時点を基準にして見るかによって結論は違ってくる(前田, 2000; 小笠原, 2005)。ここ10年ほどの期間に限って言えば、凶悪・粗暴な事件は平成15年ごろをピークとして減少の傾向にある。平成18年について見れば、刑法犯少年の中で凶悪事件によって検挙されたのはわずか1%、粗暴事件では9%にすぎない。

このように、平成12年を含むこの10年間の非行動向を見れば、重大事件を起こした少年たちは決して典型的な非行少年の姿ではないことが明らかである。むしろ、もうひとつの「十七歳問題」として多発する初発型非行の問題があることを見てとることができるだろう。したがって、事件の背景に学校や家庭でのストレスがあったとする「新・児童生徒の問題行動対策重点プログラム」の分析についても、それを非行少年一般にあてはめることには慎重でなければならない。圧倒的な多数を占める初発型非行とストレスとの関係については、改めて理論的、経験的に検討する必要がある。

一般緊張理論

逸脱行動論の中でストレス過程が目されるようになったのは、Agnew (1992, 2001) の一般緊張理論 (general strain theory, 以下 GST と略記する) 以降のことである。GST の基本になった緊張理論 (Merton, 1968) は、言うまでもなく逸脱行動に関する代表的な社会学理論のひとつであるが、この理論は 1970 年代に入るとさまざまな批判にさらされ、修正を余儀なくされてきた(大村・宝月, 1979)。そこで、Agnew は古典的緊張理論への批判と、心理的ストレス研究の成果を踏まえ、緊張の概念に新しい意味を付け加えることで現代に復活させた。すなわち、Merton の緊張理論では、文化的目標とそれを達成するために利用可能な制度的手段との乖離と定義された緊張の概念を、他者とのネガティブな関係性 (個人がこう処遇して欲しいと望むような方法で他人が処遇してくれない関係) と再定義したのである。これによって、Merton の理論がとらえたマクロな社会構造に起因する客観的緊張だけでなく、個人が嫌悪する出来事や状況といった主観的緊張も射程に入れ、幅広い逸脱行動に適用できる理論へと拡張させたのである。

GST の仮説によれば、緊張には大別して 3 つのタイプがある。a) ポジティブな価値のある目標の達成を妨げられること (例: 学業不振, 貧困, 被差別など), b) ポジティブな刺激を奪われること, あるいはその脅威 (例: 失恋, 窃盗被害など), c) ネガティブな刺激にさらされること, あるいはその脅威 (例: いじめ, 虐待やネグレクトなど), である。GST によれば、このような緊張は次に抑うつ, 不安, 恐怖, 絶望といったさまざまなネガティブな情動を引き起こすと考えられる。特に、犯罪や非行との結びつきが強いのは怒りである。怒りは被害感を強め、復讐心を引き起こし、行動に駆り立てて抑制を失わせることで、攻撃を正当化させるからである。したがって、緊張とみなされる客観的な出来事や状況がすべて逸脱行動を引き起こすのではなく、主観的にネガティブなこととして経験される出来事や状況ほど逸脱行動と強く結びつきやすいと考えられる (Froggio & Agnew, 2007)。

さらに、GST は心理的ストレス理論 (Lazarus & Folkman, 1984) を援用して、ネガティブな情動が犯罪・非行を引き起こす過程を説明する。心理的ストレス理論では、ストレッサーによってストレス反応が生じると、その低減を目的とした認知的または行動的な努力がなされると考えている。これをコーピングと呼ぶ。コーピングには認知的・行動的・情動的な多様な方略があり、内的・外的要因によって利用可能な方略は制限されている。たとえば、目標達成のために非合法な手段に訴える、不快な情動を引き起こした原因とみなされた対象を攻撃する (あるいはそこから逃避する)、ネガティブな感情を和らげるために不法な精神作用物質を使用する、等の方略が選択されるとき、それは犯罪・非行となる。つまり、GST によれば、犯罪や非行は緊張によって生じたネガティブな情動に対するコーピングのひとつ (非行型コーピング) として考えることができるのである。

以上の〈緊張-ネガティブな情動-非行型コーピング〉の仮説を基本として、GST にはさらに緊張と逸脱との関係を強めると考えられる内的・外的な条件要因に関する一連の仮説が付け加えられる。その主な内容は、逸脱行動に結びつきやすい緊張のタイプに関する仮説群と、緊張やネガティブな情動に対する非行型コーピングの選択に関わる要因に関する仮説群から成っている。これらの条件要因に関する仮説から、17 歳までの数年間に非行のピークが見られることも説明される。つまり、a) 青年期は発達の移行期に当たり環境変化が大きく、新しい状況に直面して緊張を経験する機会が増えること、b) 青年期の心理的特徴として、他者からの敬意や承認を求めるとともに、自律的であろうとする傾向から、人間関係の中でネガティブな情動を経験しやすいこと、c) 生活経験の乏しさから、青少年にはネガティブな情動に対するコーピング技能が十分に身に付いていないこと等の条件が、青年期における緊張-非行の結びつきを強めていると考えられるのである。

GST を構成する一連の仮説について、これまで多くの経験的な検証がなされてきた (Froggio, 2007)。その結果、緊張が非行を引き起こすという基本仮説

についてはおおむね支持されており (Agnew & White, 1992; Brezina, 1996; Broidy, 2001; Cheung, Ngai & Ngai, 2007; Hay & Evans, 2006; Hoffman & Ireland, 2004; Hoffman & Miller, 1998), 成人の犯罪との関連についても仮説を支持する結果が得られている (Hinduja, 2007; Jang & Johnson, 2003; Langton & Piquero, 2007)。しかし, ネガティブな情動と非行型コーピングとの関係についての仮説と条件要因に関する諸仮説については必ずしも一貫した結果が得られていない。前者については, 仮説を支持する研究がある一方で (Jang & Johnson, 2003), 仮説に反する結果も得られている (Broidy, 2001; Mazerolla, Burton, Cullen, Evans, & Payne, 2000; Sigfusdottir, Asgeirsdottir, Gudjonsson, & Sigurdsson, 2008)。たとえば Broidy (2001) では, 怒りと非行との間には有意な正の関連が認められたが, 怒り以外のネガティブな情動と非行の間には負の関連があることが示されている。つまり, GST の仮説とは異なり, 怒り以外のネガティブな情動は非行を抑制していたことになる。また, Mezerolle & Piquero (1998) と Capowich, Mezerolle & Piquero (2001) は怒りに焦点を当てタイプの異なる逸脱行動への影響を検討したところ, 怒りと有意な関連を示したのは暴力行動だけで, 薬物使用や万引きとは関連が認められなかった。

また, 条件要因に関する仮説については, 内容が多岐にわたり数も多いため, 必ずしも組織的に検討されているわけではない。心理学的な要因としては, 緊張に対する情動反応の強さを規定する要因 (情動反応性) やネガティブな情動への適切な対処を可能にするような資源となる要因 (自尊感情, 自己効力感等) が扱われているが (Agnew, Brezina, Wright, & Cullen, 2002; Agnew & White, 1992), その結果はまちまちである。また, GST の理論の中では, 性差, 民族差あるいは文化差等はすべて条件要因によって説明されなければならない。たとえば, 非行や犯罪の発生率に見られる大きな性差について, Broidy & Agnew (1997) は緊張が引き起こす情動のタイプに性の要因が関与し, 女性は緊張に対して怒りより抑うつ反応を引き起こしやすいために逸脱行

動が少ないと解釈している。しかし, この仮説も十分に支持されているわけではない (Broidy, 2001; Drapela, 2006)。

このように, GST の主張は「新・児童生徒の問題行動対策重点プログラム」の問題意識に理論的裏付けを与えるものとなっている。しかし, 理論としては今なお発展の途上にあり, 情動と逸脱行動の関係や条件要因については理論的にも経験的にもなお検討されなければならない問題が数多く残されている。また, 心理的ストレス・モデルとも重複する仮説を含んでいることから, 双方の視点からの検討も必要であろう。そこで本研究では, 万引きや自転車盗といった初発型非行を含む相対的に軽微な逸脱行動について, GST と心理的ストレス・モデルの両面から検討を加えた。

本研究の仮説

本研究では, 平成 12 (2000) 年に実施された群馬県青少年調査の一般高校生資料を利用し, 初発型非行を含む相対的に軽微な逸脱行動について検討した。まず, GST に基づき次の 2 つの仮説を立てた。

仮説 1. 家庭生活や学校生活で経験する緊張はネガティブな情動を引き起こす。

仮説 2. ネガティブな情動は逸脱行動傾向を強める。

さらに, 心理的ストレス・モデル (古屋・音山, 1999; 古屋・音山, 2002) に基づき, 逸脱行動を二次反応に伴う適応障害として位置づけ, 次の 2 つの仮説を立てた。

仮説 3. ネガティブな情動は二次反応を引き起こす。

仮説 4. 二次反応は逸脱行動傾向を強める。

GST との違いは, 逸脱行動を情動に対するコーピングとしてはではなく, 情動反応に伴って生ずる心理的機能低下による適応障害として位置づけた点である。

また, ネガティブな情動と逸脱行動との関連に見られる性差について検討を加えるために, 分析は男女別に行うこととした。

II. 方 法

調査対象

本研究は群馬県（2001）による第4回ぐんま青少年基本調査の一部として行われた内容の統計的データの再分析である。対象は群馬県内12校の高校2年生533名で、有効回答は男子216名、女子300名の519名（回収率97.37%）であった。

質問紙の構成

a) ストレス反応尺度 PSRS-50R(新名ら, 1990; 新名, 1994) をモデルに一部の項目表現を見童生徒向けに変更したストレス反応尺度で, 古屋・音山(2002)によりその構造は詳細に分析されている。ネガティブな情動として抑うつ不安(不安合計v30, 抑うつ合計v31, 悲哀合計v32:vは変数番号で, 以下同じ)と怒り(いらいらするv40, むしゃくしゃするv41, 腹が立つv42)を, 二次反応として引きこもり(人と会いたくないv51, 話したくないv52, 独りでいたいv52)、攻撃(暴れたいv60, どなりたいv61, 壊したいv62), 無気力(やる気がないv70, めんどくさいv71, 勉強する気がないv72)を測定できる。

b) 学校生活の緊張 学校生活の緊張について分析した。調査票の「I(学校生活)-A」の12項目, ならびに学業の状況に関連する項目, すなわち調査票の「I(学校生活)」のB~D(授業の理解度, 成績, 勉強への自信の程度)に該当する。“次のことについて, あなたのクラスや学校はAとBのどちらに当てはまりますか”との設問に, 「1:Aに近い」「2:ふつう」および「3:Bに近い」の3件法で回答を求めた。設問は全てBがネガティブな構成であり, たとえば「A:授業がおもしろい」に対して「B:授業がつまらない」というように, 項目得点が高いほど学校生活に快適でない状況を反映するようになっている。項目は他に「先生が生徒のことを理解してくれない」「クラブや部活がつまらない」「つまらない学校行事が多い」「進路(進学・就職)指導や学習指導をしてくれない」「生徒の自由にさせてくれない」「いい友だちや先輩がいない」「クラスにまとまりがない」「校舎・体育館など施設がみすばらしい」「学校

のきまりが守られていない」「校則が厳しい」および「学校全体がだらけている」である。学業状況については, 授業の理解度について“あなたは学校の授業をどれくらい理解できていますか”との設問に, 「1:ほとんど理解できる」から「5:ほとんど理解できない」の5件法で, 成績について“あなたの学校での成績はどのくらいですか”との設問に, 「1:上の方」から「5:下の方」の5件法, そして勉強への自信の程度について“あなたは勉強に自信がありますか”との設問に, 「1:自信がある」から「5:自信がない」の5件法で回答を求めた。

c) 家庭生活の緊張 高校生が経験する可能性があると思われる緊張状況のうち, 特に家や家族に関連するものについて分析した。①“家族関係の悩みv10”(調査票の「IV(生活全般)-B」のうち「家や家族のこと」)について, 「1:悩みはない」から「4:今, とても悩んでいる」の4件法で回答を求めた。②“家庭生活への不満v11”(調査票の「IV(生活全般)-A」のうち, 「家族との生活について」)について, 「1:とても満足」から「5:とても不満」までの5件法で回答させた。③家庭での悩みごと(調査票の「II(家庭生活)-F」の“特になし”を除く)9項目。すなわち「家の収入が少ない」「家が狭い」「家族の中でけんかや争いがある」「きょうだいと気が合わない」「親が子どものことを理解してくれない」「家族に病気がちの人や体の不自由な人がいる」「自分の自由になる部屋がない」「親が子どもに体罰をふるう」からなる。“家や家族のことで何か悩んでいることや心配なことがありますか”との設問に, ある(1), なし(0)の2件法で回答させた。

d) 逸脱行動 高校生が学校生活を含め日常生活のなかで遭遇し, 行動する可能性があると考えられる規範から逸脱した行動18項目のうち, 性差が大きい「成人向けの本やビデオ」を除いた17項目。調査票の「V-A」に相当する。すなわち, 万引き, 無免許運転, 自転車を盗む, 他人の傘を勝手に使う, タバコ, 酒, パチンコ, 授業をさぼる, 授業中のいねむり, 髪を染める, カンニング, 夜のカラオケ, 悪口や仲間はずれ, いたずら, ゴミの投げ捨て, 無断外泊, 行列への割り込み, である。“あなたと同じ学年

(年齢)の人が次のようなことをすることについて、あなたはどのように思いますか”の設問について、「1:そのようなことをする気持ちがわからない」「2:気持ちわかるが、自分はしない」および「3:気持ちもわかるし、自分もやってみたい」の3件法によって測定した。

手続き

調査は無記名で行われ、教員の指導のもとにクラス内で一斉に配布され、即日記入後回収された。

III. 結果

各要因の構成概念の確認と尺度作成

a) 学校生活の緊張

学校生活の緊張 11 項目について因子分析(主因子法, 固有値 1 以上基準, Promax 回転)を行った結果, 3 因子を得た(表 1)。因子 I は「だらけている」や「いい友人・先輩がいない」, 「クラスにまとまりがない」といった項目によって構成されており, “つまらなさ v20” と表現できる。因子 II は「自主性が尊重

されない」「校則が厳しい」によって構成され, “厳しさ v21” に相当する。因子 III は「授業がつまらない」「きまりが守られていない」「学習・進路指導がない」など, “指導への不満 v22” を表している。因子間相関については 3 因子とも相互に中程度の相関が認められた。 α を求めると, “つまらなさ”(5 項目) は $\alpha = .689$, “厳しさ” は 2 項目であるものの $\alpha = .660$ であり, いずれも十分な値であった。“指導への不満”(4 項目) は $\alpha = .587$ とそれほど高い値ではなかったものの, 概念的にはまとまりのある項目と解釈されることから, これら項目についても合計値を以下の分析に用いることとした。

学業状況については, 主成分分析を行った結果, 第 1 主成分の分散説明率は 75.2% であった(第 1 主成分解: 授業の理解度 .884, 成績 .865, 勉強への自信の程度 .853)。 α は .793 であり, 十分高いことが示され, 3 項目を合計し “学業の状況 v23” とした

b) 家庭での悩みごと

家庭での悩みごと 9 項目について主成分分析を行った結果, 「家族のけんか (.672)」や「親の理解がない (.584)」で負荷が高く, 「家族に弱者 (.270)」

表 1 学校生活で経験する緊張場面の因子分析結果および α 係数

	因子 ^{*1}			h^2	α^{*2}
	I	II	III		
I つまらなさ					.689
1 だらけている	.665	.137		.481	
2 いい友人・先輩がいない	.549	-.159	.179	.357	
3 クラスにまとまりがない	.546	-.110	.149	.349	
4 学校行事がつまらない	.511	.210	-.135	.323	
5 クラブ、部活がつまらない	.231	.177	.200	.240	
II 厳しさ					.660
6 自主性が尊重されない		.723		.596	
7 校則が厳しい		.712	-.141	.418	
III 指導への不満					.587
8 授業がつまらない		.295	.546	.464	
9 きまりが守られていない		-.112	.430	.158	
10 学習・進路指導がない	.176	-.127	.396	.211	
11 先生が理解してくれない		.306	.340	.281	
抽出後の負荷量	2.654	.759	.464		
分散の%	24.125	6.898	4.216		
因子相関行列	I	.443	.514		
	II		.440		

*1主因子法、プロマックス回転。 .10 未満の係数は表示していない。

*2 α 係数は標準化された α 係数。

「親の体罰 (.441)」など頻度が少ない項目では小さく示され、 α は.580 と必ずしも十分ではないものの、項目が削除された場合の α を見る限り削除候補は見当たらず、以下の分析では9項目を合計した“家庭での悩みごと v12”とした。

c) 緊張要因間の関係

学校生活の緊張と家庭生活の緊張に関する各要因・項目を因子分析したところ、学校生活と家庭生活の2因子を得た(表2)。 α は家庭生活で.753、学校生活で.612と、ともに良好であった。学校生活における学業の状況の共通性が低いものの、概念的には学校生活に含まれるべき項目であると判断し、以下の分析に含めることとした。

d) 逸脱行動

逸脱行動17項目について同様に因子分析を行った結果、4因子が抽出された(表3)。因子Iは「髪を染める」「夜のカラオケ」「いねむり」などにより構成され、“生活の乱れ v80”を表していると解釈される。因子IIは「いたずら」「悪口や仲間はずれ」「ゴミの投げ捨て」によって構成され、“迷惑行為 v81”と解釈される。因子IIIは「自転車を盗む」「傘を勝手に使う」「万引き」から構成され、“初発型非行 v82”と表わされる。因子IVは「タバコ」「酒」「パチンコ」「無免許運転」から構成され、“年齢制限違反 v83”と表わすことができる。因子間相関についてはいず

れの関係も $r > .5$ であり中程度以上の相関がみられた。最も高い相関がみられたのはいずれも法律や条例に違反する行為によって構成される“年齢制限違反”と“初発型非行”との間であった ($r = .701$)。 α は“生活の乱れ”が $\alpha = .798$ ，“迷惑行為”が $\alpha = .706$ ，“初発型非行”が $\alpha = .780$ ，“年齢制限違反”は $\alpha = .777$ ，17項目全体では $\alpha = .899$ であり、いずれも十分高い値であった。

学校生活・家庭生活が情動に及ぼす影響

学校生活および家庭生活の緊張が情動反応に及ぼす影響を検討するため、重回帰分析を行った。学校生活で経験する緊張状況を構成する“つまらなさ”“厳しさ”“指導への不満”および“学業状況”を合計して“学校生活”を、“家庭生活への不満”“家族関係の悩み”および“家庭での悩みごと”を合計して“家庭生活”を作成し、独立変数とした。抑うつ不安と怒りとを従属変数とし、男女別に重回帰を行った結果を表4に示す。男子では、抑うつ不安に対しては ($R^2 = .078$) 家庭生活のみ有意 ($\beta = .246$) であった。怒りに対しては ($R^2 = .099$) 学校生活と家庭生活ともに有意であったが、家庭生活 ($\beta = .146$) に比較して学校生活 ($\beta = .254$) のほうがより強く影響していることが示された。女子では、抑うつ不安 ($R^2 = .236$)、怒り ($R^2 = .195$) 両モデルともに、学

表2 緊張要因の各合成変数に対する因子分析結果および α 係数

	平均	SD	因子*1		h^2	α^{*2}
			I	II		
家庭生活						.753
1 家族関係の悩み	1.8	0.98	.827		.653	
2 家庭生活への不満	2.5	1.08	.668	.121	.508	
3 家庭での悩みごとの数	0.9	1.29	.641		.403	
学校生活						.612
4 指導への不満	8.4	1.56		.617	.392	
5 学校生活のつまらなさ	9.3	1.96		.580	.326	
6 学校生活の厳しさ	4.6	1.09		.553	.303	
7 学業の状況	9.8	2.52		.386	.154	
抽出後の負荷量			1.808	.930		
分散の%			25.823	13.289		
因子相関行列				.294		

*1主因子法、プロマックス回転。 .10未満の係数は表示していない。

*2 α 係数は標準化された α 係数。

表3 逸脱行動の因子分析結果および α 係数

	因子*1				h^2	α^{*2}
	I	II	III	IV		
I 生活の乱れ						.798
1 髪を染める	.750	-.130			.572	
2 夜のカラオケ	.734				.544	
3 いねむり	.683				.444	
4 授業をさぼる	.510	.234			.455	
5 無断外泊	.323	.206		.159	.345	
II 迷惑行為						.706
6 いたずら	-.236	.673		.176	.444	
7 悪口や仲間はずれ	.295	.596	-.129	-.197	.365	
8 ゴミの投げ捨て		.448	.215		.393	
9 カンニング		.439	.113	.143	.373	
10 行列への割り込み		.393	.139		.272	
III 初発型非行						.780
11 自転車を盗む			.961		.819	
12 傘を勝手に使う	.124		.705		.582	
13 万引き		.258	.299	.134	.389	
IV 年齢制限違反						.777
14 タバコ				.740	.543	
15 酒	.328	-.167		.648	.616	
16 パチンコ		.214		.611	.437	
17 無免許運転	.153		.294	.337	.468	
抽出後の負荷量	6.034	0.973	0.584	0.470		
分散の%	35.492	5.722	3.435	2.765		
因子相関行列	I	.511	.566	.632		
	II		.624	.575		
	III			.701		

*1主因子法、プロマックス回転。10未満の係数は表示していない。

*2 α 係数は標準化された α 係数。

表4 学校生活、家庭生活による情動反応の重回帰分析

性別	従属変数	独立変数	b	SE	Std. β	R ²	Adj-R ²
男子	抑うつ不安	(定数)	10.107**	3.253		.078	.069**
		学校生活	.140	.100	.095		
		家庭生活	.681**	.188	.246		
	怒り	(定数)	1.900	1.284		.099	.090**
		学校生活	.149**	.040	.254		
		家庭生活	.161*	.074	.146		
女子	抑うつ不安	(定数)	5.145*	2.469		.236	.231**
		学校生活	.368**	.079	.247		
		家庭生活	.931**	.136	.365		
	怒り	(定数)	2.518**	.911		.195	.189**
		学校生活	.102**	.029	.191		
		家庭生活	.327**	.050	.356		

*p<.05 **p<.01

表5 学校生活, 家庭生活および情動反応による二次反応の重回帰分析

性別	従属変数	Step	独立変数	b	S.E.	Std.β	R ²	Adj-R ²	ΔR ²	
男子	攻撃	I (定数)		1.153	1.396		.098	.089	.098**	
			緊張	家庭生活	.218**	.081	.182			
			学校生活	.144**	.043	.224				
		II (定数)		-.439	1.045		.522	.513	.424**	
			緊張	家庭生活	.088	.061	.073			
			学校生活	.033	.033	.052				
	情動	抑うつ不安	.023	.025	.053					
		怒り	.716**	.063	.659					
					<hr/>					
	無気力	I (定数)		2.233*	1.111		.156	.148	.156**	
			緊張	家庭生活	.109	.064	.110			
			学校生活	.190**	.034	.360				
II (定数)			1.099	1.027		.318	.304	.162**		
		緊張	家庭生活	.023	.060	.023				
		学校生活	.139**	.032	.264					
情動	抑うつ不安	.059*	.025	.165						
	怒り	.283**	.062	.317						
				<hr/>						
引きこもり	I (定数)		3.451**	1.265		.071	.062	.071**		
		緊張	家庭生活	.245**	.073	.228				
		学校生活	.058	.039	.101					
	II (定数)		1.443	1.091		.346	.333	.275**		
		緊張	家庭生活	.103	.064	.096				
		学校生活	.005	.034	.008					
情動	抑うつ不安	.160**	.026	.413						
	怒り	.206**	.066	.212						
				<hr/>						
女子	攻撃	I (定数)		3.086**	1.024		.111	.105	.111**	
			緊張	家庭生活	.288**	.056	.295			
			学校生活	.057	.033	.100				
		II (定数)		1.222	.820		.451	.443	.340**	
			緊張	家庭生活	.051	.049	.052			
			学校生活	-.019	.027	-.033				
	情動	抑うつ不安	.027	.021	.071					
		怒り	.657**	.058	.617					
					<hr/>					
	無気力	I (定数)		2.099*	.839		.231	.226	.231	
			緊張	家庭生活	.239**	.046	.278			
			学校生活	.166**	.027	.332				
II (定数)		(定数)	.934	.747		.414	.406	.182		
		緊張	家庭生活	.066	.045	.077				
		学校生活	.102**	.025	.204					
情動	抑うつ不安	.107**	.019	.317						
	怒り	.239**	.052	.255						
				<hr/>						
引きこもり	I (定数)		3.169**	.965		.101	.095	.101		
		緊張	家庭生活	.239**	.053	.261				
		学校生活	.069*	.031	.130					
	II (定数)		2.058*	.876		.288	.278	.187		
		緊張	家庭生活	.060	.052	.065				
		学校生活	-.001	.029	-.001					
情動	抑うつ不安	.150**	.023	.419						
	怒り	.136*	.062	.136						
				<hr/>						

*p<.05 **p<.01

表6 緊張状況と、情動反応もしくは二次反応による逸脱行動の重回帰分析

性別	モデル(*1)	Step	独立変数	b	S.E.	Std.β	R ²	Adj-R ²	ΔR ²					
男子	①緊張 情動 ↓ 逸脱行動	I	(定数)	6.727*	3.285		.213	.205	.213**					
			緊張	家庭生活 .271 学校生活 .704**	.190 .101	.089 .437								
	II	(定数)	緊張	家庭生活 .300 学校生活 .684**	.196 .105	.099 .424	.219	.204	.007**					
			情動	抑うつ不安 -.096 怒り .222	.080 .204	-.088 .081								
		②緊張 二次反応 ↓ 逸脱行動	I	(定数)	7.065*	3.266					.208	.201	.208**	
				緊張	家庭生活 .269 学校生活 .696**	.191 .100				.088 .433				
		II	(定数)	緊張	家庭生活 .230 学校生活 .615**	.196 .108				.075 .383	.224	.205	.016**	
				二次反応	無気力 .442 ひきこもり -.021 攻撃 -.014	.241 .208 .183				.143 -.008 -.005				
	女子		①緊張 情動 ↓ 逸脱行動	I	(定数)	14.620**	2.236		.209	.204				.209**
					緊張	家庭生活 .661** 学校生活 .387**	.123 .072	.291 .292						
			II	(定数)	緊張	家庭生活 .527** 学校生活 .333**	.134 .074	.232 .252	.231	.220				.022**
					情動	抑うつ不安 .155** 怒り -.033	.058 .158	.174 -.013						
②緊張 二次反応 ↓ 逸脱行動		I		(定数)	14.290**	2.256		.207			.202	.207**		
				緊張	家庭生活 .633** 学校生活 .400**	.124 .072	.278 .300							
II	(定数)	緊張		家庭生活 .433** 学校生活 .283**	.126 .073	.190 .213	.298	.285			.090**			
		二次反応		無気力 .708** ひきこもり -.322* 攻撃 .385**	.171 .141 .132	.266 -.129 .165								

*1)有効データ数が異なるため、モデル①とモデル②との間でStep Iの結果は若干異なる。

*p<.05 **p<.01

校生活と家庭生活とも有意でありR²も男子に比べて高かった。係数はいずれも正であり、学校生活(抑うつ不安モデル:β=.247;怒りモデル:β=.191)に比較して家庭生活(順にβ=.365;β=.356)のほうがより強く影響していることが示された。

情動反応が二次反応に及ぼす影響

情動反応が二次反応に及ぼす影響を検討するため、学校生活および家庭生活を先行投入し(step I)これらの効果を除外した上で、情動反応を投入(step II)する階層的重回帰分析を男女別に行ない、step II

でのR²の増分(ΔR²)を検討した(表5)。

Step Iでは、男女とも学校生活が無気力に及ぼす影響が有意であった(男子β=.264,女子β=.204)。Step IIでは、男子は攻撃に対しては(ΔR²=.424)怒りが有意、無気力に対しては(ΔR²=.162)抑うつ不安と怒りがともに有意、引きこもりに対しても(ΔR²=.275)抑うつ不安と怒りがともに有意であった。女子は攻撃に対しては(ΔR²=.340)怒りが有意、無気力(ΔR²=.182)と引きこもり(ΔR²=.187)についてもそれぞれ抑うつ不安と怒りがともに有意であった。係数はいずれも正であり、ネガティブな

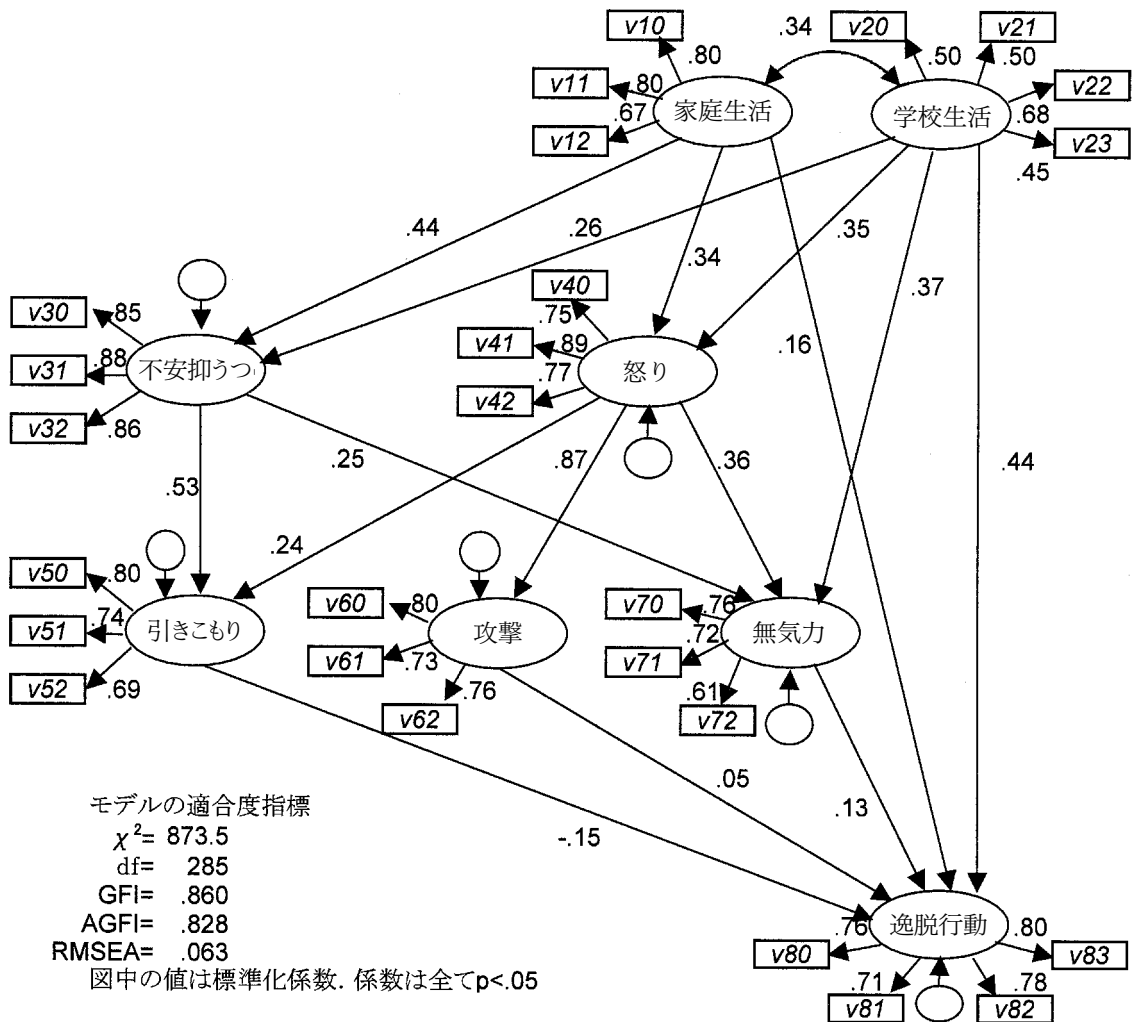


図1 緊張ストレス・モデルと、男女を合わせたデータによる分析結果

情動が強いほど、二次反応を引き起こすことが示された。

ストレス過程が逸脱行動に及ぼす影響

ストレス過程が逸脱行動に及ぼす影響を検討するため、学校生活および家庭生活で経験する緊張状況を先行投入しそれら効果を除外した上で情動反応もしくは二次反応を投入する階層的重回帰分析を行った。逸脱行動17項目を合計したものを従属変数とし、緊張状況をstep I、情動反応もしくは二次反応をStep IIで投入し、男女別に分析を行った結果を表7に示す。

男子では、Step IIで緊張状況と情動反応とを投入したモデルでは、 R^2 の増分は有意に示されているものの ($\Delta R^2 = .007$)、情動反応の顕著な効果は認められなかった。Step IIで緊張状況と二次反応を投入したモデルでも同様に、 R^2 の増分は有意ではあるが ($\Delta R^2 = .016$)、二次反応の顕著な効果は認められなかった。

女子では、Step IIで緊張状況と情動反応とを投入したモデル ($\Delta R^2 = .022$) では、情動反応のうち抑うつ不安が有意であり ($\beta = .174$)、正の効果すなわち抑うつ不安が高いと逸脱行動も高くなる結果が示された。Step IIで緊張状況と二次反応を投入したモデル

表7 緊張ストレス・モデルの男女別同時解析における係数、標準誤差及び標準化係数

パス	男子			女子		
	b	S.E.	Std.β	b	S.E.	Std.β
家庭生活 → 怒り	.158*	.065	.204	.300**	.052	.402
家庭生活 → 抑うつ不安	.737**	.181	.350	1.020**	.150	.429
学校生活 → 抑うつ不安	.381*	.189	.181	.944**	.163	.397
学校生活 → 怒り	.322**	.072	.414	.246**	.056	.329
学校生活 → 無気力	.279**	.077	.377	.274**	.072	.350
抑うつ不安 → 無気力	.070*	.026	.199	.116**	.025	.352
抑うつ不安 → 引きこもり	.189**	.030	.556	.190**	.024	.566
怒り → 無気力	.362**	.086	.380	.279**	.074	.266
怒り → 引きこもり	.280**	.069	.304	.139*	.069	.130
怒り → 攻撃	1.071**	.101	.884	1.095**	.095	.849
学校生活 → 逸脱行動	1.320**	.277	.630	.398*	.174	.254
攻撃 → 逸脱行動	-.100n.s.	.212	-.045	.152n.s.	.123	.093
無気力 → 逸脱行動	.046n.s.	.376	.016	.620*	.237	.310
引きこもり → 逸脱行動	-.163n.s.	.254	-.056	-.446*	.146	-.227
家庭生活 → 逸脱行動	.062n.s.	.182	.030	.386*	.120	.246

*p<.05 ** p<.01

($\Delta R^2=.090$) では、無気力 ($\beta=.266$), 引きこもり ($\beta=-.129$), 攻撃 ($\beta=.165$) が有意であり、無気力もしくは攻撃が高いと逸脱行動も高くなる一方、引きこもりが高いと逸脱行動は低くなることが示された。

ストレス過程と逸脱行動のパス・モデル

以上の重回帰分析の結果に基づいて、〈緊張ーストレスー逸脱行動〉の関係についてモデル構成を試みた。モデル仮説は以下の通りである。

仮説1：家庭生活と学校生活の緊張は抑うつ不安と怒りを引き起こす。

仮説2：抑うつ不安と怒りは無気力・引きこもり・攻撃を引き起こす。

仮説3：無気力・攻撃は逸脱行動傾向に正の、引きこもりは負の影響を与える。

仮説4：緊張は情動を仲介せずに無気力を引き起こす。

仮説5：緊張は情動・二次反応を仲介せずに逸脱行動を引き起こす。

仮説4は心理的ストレス・モデルによる仮説2を補足するものであり、仮説5はストレス過程によらない緊張の影響を示すものである。図1に男女を合わせた資料による分析結果を示す。逸脱行動の R^2

は.35であった。次に、男女別に同時解析を行ったモデル ($\chi^2=1184.9^{**}$, $df=570$, $GFI=.822$, $AGFI=.781$, $RMSEA=.046$) について係数を比較すると(表7), 男子では逸脱行動の説明要因としては学校生活のみが有意 ($\beta=.630$) であった。一方、女子では無気力 ($\beta=.310$), 引きこもり ($\beta=-.227$), 家庭生活 ($\beta=.246$) から逸脱行動へのパスが有意であり、学校生活から逸脱行動へのパスも有意 ($\beta=.254$) であった。逸脱行動の R^2 は男子が.38, 女子が.41であった。攻撃から逸脱行動へのパスは男女ともに有意ではなかった。

IV. 考 察

本研究では、GSTと心理的ストレス・モデルから導かれた4つの仮説について検討した。以下、緊張と情動に関する仮説1, 情動と二次反応に関する仮説3, 逸脱行動傾向に関する仮説2と4について考察する。

緊張と情動

Agnew (1992) は緊張を他者とのネガティブな関係性と定義し、先行研究では親の拒否, 虐待, 犯罪被害, ホームレス等の状況特異的緊張 (Agner, 2002 ;

Hay & Evans, 2006; Sigfusdottir, Asgeirsdottir, Gudjonsson, & Sigurdsson, 2008)あるいは累積的緊張(ストレスフルなライフイベント)が緊張の測定として利用されてきた。本研究では既存の調査資料を再利用したため、緊張の測定を意図した調査項目が設定されていたわけではない。そこで、高校生が緊張を経験する状況として学校生活と家庭生活の2領域を想定し、各領域での悩みや不満に関する質問項目を用いて累積的緊張の測定とした。類似した緊張の測定にBrezina (1996)やCheung, Ngai & Ngai (2007)のものがある。Brezinaは親の懲罰、不愉快な教師、学校への不満の3つの下位尺度を構成し、その合計点を緊張の指標として用いている。本研究で利用した質問項目では悩みや不満の具体的内容は細分化されていないが、生活が望ましい状態にない程度を示すものであり、緊張の指標とみなすことができるであろう。

仮説1では、家庭生活や学校生活で経験する緊張がネガティブな情動を引き起こすと予想した。抑うつ不安得点と怒り得点を従属変数とする重回帰分析の結果はこの仮説を支持している。ただし、情動を引き起こす緊張の内容には性差が認められ、女子の場合は学校生活と家庭生活の両方が2つのタイプのネガティブな情動に影響を及ぼしていたが、男子の場合は抑うつ不安に対しては家庭生活、怒りに対しては学校生活の緊張が大きな影響を及ぼしていた。そのため、説明率も、女性より男性で低くなっている。この結果は、学校生活や家庭生活での緊張とネガティブな情動との関係は相対的に男子より女子の方が強いことを示唆している。

情動得点の分散説明率(R^2)は通常の心理的ストレス研究と比較すると低くなっている。特に男子の説明率は10%以下である。これはストレス研究で扱うストレスと緊張との違いによる。ストレスと緊張はいずれもネガティブな情動を引き起こすと考えられている点で共通しているが、概念としては明確に区別される(古屋・坂田・音山, 1997)。ストレスは心理的ストレス過程を発動させる契機となる出来事や状況を指す概念で、結果としてストレス過程を引き起こす原因となった事柄はすべて

ストレスと呼ばれる。つまり、ストレスとはその帰結から定義されるもので、その内容は生命に対する深刻な脅威(トラウマ)から、日常生活の小さな苛立ち事(デイリーハラスルズ)まで幅広い(Wheaton, 1996)。一方、緊張の概念はネガティブな関係性と定義され、ネガティブな情動を引き起こすとされるのは仮説にすぎない。したがって、ネガティブな情動を引き起こさない緊張はありうるが、ストレスに結びつかないストレスは考えられない。

これに関連して、GSTの仮説に対して理論的な問題が提起される。GSTによれば、緊張はネガティブな情動を媒介に逸脱行動を引き起こすと仮定されるが、ネガティブな情動を引き起こさない緊張は人間行動に対してどのような意味を持っているのか、また緊張による情動と緊張以外のストレスによって引き起こされた情動は区別されるのかどうか、理論の中で明確ではない。もし、情動を引き起こさない緊張が何ら行動に影響を及ぼすものでなく、緊張による情動も他の原因による情動も区別されないのであれば、緊張の概念はストレスのひとつのタイプを指すだけのものになってしまう恐れがある。今後、経験的検討を踏まえた理論の精緻化が必要である。

情動と二次反応

仮説3では、心理的ストレス・モデルに基づき、ネガティブな情動反応は二次的反応を引き起こすと予想した。重回帰分析の結果、引きこもりと無気力は抑うつ不安と怒りの両方の情動反応によって、攻撃は怒りによって引き起こされていることが示され、またその説明率も十分に高く、仮説は支持されたと言えよう。

重回帰分析の結果からは、二次反応に緊張要因が直接的な影響を与えていたことも示されている。男女ともに認められたのは、学校生活の緊張が無気力に及ぼす影響である。特に、授業がつまらない等、学校で受ける指導への不満が無気力を生んでいる。心理的ストレス・モデルによれば、無気力は意欲面での機能低下を代表する二次反応のひとつで、ネガ

ティブな情動が長期にわたって繰り返し経験された場合になどに出現すると考えられている。しかし、この結果からは、生活環境の中に意欲を高めるような刺激が見いだせないことが、無気力の直接的な原因となっていることが示唆される。学校生活の緊張はネガティブな情動にも大きな影響を及ぼしており、情動を介した間接的な影響も強いことから、高校生の無気力の最大の原因は学校生活にあるとすることができると言える。

逸脱行動傾向

因子分析の結果に基づき、逸脱行動傾向 17 項目は 4 つの下位尺度に分けることができた。「生活の乱れ」には染髪、授業中のいねむり、怠学、夜遊びといった非行化の兆候とされる生活の乱れを示す行動が並んでいる。逸脱の程度としては最も軽いものである。「迷惑行為」にはいやがらせや社会のルールを無視した自己中心的な行動が含まれ、いじめにつながる内容を含んでいる。「初発型非行」は万引き・自転車盗と他人の傘を勝手に使うという 3 種の窃盗罪から成る。また、「年齢制限違反」は喫煙・飲酒・パチンコ・無免許運転から構成される。海外の先行研究では、飲酒・喫煙はマリファナ使用などとともにドラッグ使用のカテゴリーで扱われることが多いが、本研究では年齢制限に対する違反行為でまとまった。最後の 2 つの下位尺度は明らかに法律や条例に反する非行行為である。

調査の性質上、設定できる項目数に制限があったため、頻度の多い非行行為で調査からもれた内容もある。ひとつはけんかや器物破損といった暴力行為であるが、これについては二次反応の攻撃得点から推測することができる。もうひとつは、引ったくりや自販機荒らし・車上荒らし等の街頭犯罪であるが、これらは万引きや自転車盗と比較しても逸脱の程度が大きく、一般生徒を対象とした場合に分析に耐えうるほどの肯定的反応が得られるとは予想できなかったため、調査の設問から除外した。本研究でも万引きや自転車盗について、「自分もやってみたい」と回答した者は数%にすぎないことから、この判断は妥当であったと言えよう。したがって、抽出され

た 4 因子は、一般の高校生にとって身近な逸脱行動を代表するものと考えられる。

逸脱行動に影響を与える要因については 2 つの仮説が立てられた。ひとつは GST に基づきネガティブな情動に対するコーピングとする仮説 2 であり、もうひとつは心理的ストレス・モデルに基づき二次反応に起因する適応障害とする仮説 4 である。結果には顕著な性差が認められ、男子では生活の乱れに二次反応の無気力が正の影響を及ぼしてただけで、仮説 2・4 とともに支持されなかった。女子の場合は情動の抑うつ不安と二次反応の無気力と攻撃が逸脱行動に正の影響を、二次反応の引きこもりが負の影響を与えていることが示され、仮説 2・4 とともに支持された。説明率の高さから判断すると、二次反応の影響の方が相対的に大きいことから、仮説 4 に有利な結果と言えよう。なお、引きこもりの結果は逸脱行動に対する抑制効果を示しており、二次反応のタイプによって逸脱行動に及ぼす影響には違いがあると考えられる。引きこもり傾向は非社会的行動との親和性が高いことから、女子の場合には逸脱行動のような反社会的行動と非社会的行動は両立しないことを示唆している。

また、男女ともに学校生活の緊張が、また女子では家庭生活の緊張も逸脱行動に直接的影響を持つことが示された。これは心理的ストレス過程を仲介しないプロセスが関与していることを示している。

緊張ストレス・モデル

重回帰分析の結果に基づく仮説によるパス・モデルの分析結果は、緊張と逸脱行動を仲介する過程にネガティブな情動によって生じる二次反応が関与していることを明らかにした。これを緊張ストレス・モデルと呼ぶことにする。

緊張ストレス・モデルは性差を前提としており、逸脱行動の説明要因が大きく異なっている。女子の結果によれば、逸脱行動に関するモデル仮説 3 に基づくパスは無気力、引きこもりともに有意であるが、一方、男子ではいずれも有意でない。代わりにモデル仮説 5 のパス係数が大きく、緊張はストレス過程を仲介せず逸脱行動に対して直接的な影響を及ぼ

している。つまり、緊張ストレス・モデルは、女子の場合、緊張が心理的ストレス過程を経て逸脱行動傾向を高めることを、男子の場合、緊張は心理的ストレス過程と逸脱行動傾向を独立に引き起こすことを示している。

このモデルについては、今後さらに検討を加えなければならない。最大の課題は性差の解明である。モデルでは顕著な性差として、男子より女子で家庭生活の緊張の影響が強いこと、男子では二次反応が逸脱行動を引き起こさないことが示された。まず、家庭生活の緊張の役割については、マクロな社会的要因を考慮する必要がある。Agnew (1992) は、価値ある目標の達成を妨害されることで生じる緊張には、文化的に価値ある目標と達成期待の乖離、目標達成期待と現実の目標達成度の乖離、自分が受けるに値する公平な成果と現実で得た成果との乖離の3つのケースがあるとしている。特に公平な成果と現実の成果の乖離は不公平感を生み、怒りを引き起こしやすいとされていることから、家庭における女子高校生の役割や地位の中に不公平感を生むような特徴が隠されているのかもしれない。今後は、緊張の測定方法を工夫することで、このような社会的要因についても分析していく必要がある。

次に、男子の逸脱行動については、本研究で扱わなかった他の二次反応について検討を加える必要がある。たとえば、絶望感、自信喪失、対人不信、認知的混乱等が逸脱行動と結びつく可能性がある。また、先行研究では逸脱傾向を持つ仲間関係が逸脱行動に大きな影響を及ぼすことが示されている。もし非行傾向を持つ仲間との交流がネガティブな情動に対するコーピングとしてなされると、結果的にネガティブな情動を緩和する効果を持つことになる。本研究のような横断的手法ではこのプロセスを解明することができないため、今後は縦断的な調査も必要となるだろう。

引用文献

Agnew, R. (1992). Foundation for a general strain theory of crime and delinquency. *Criminology*, 30, 47-87.
 Agnew, R. (2001). Building on the foundation of general

strain theory: Specifying the types of strain most likely to lead to crime and delinquency. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, 38, 319-361.
 Agnew, R. (2002). Experienced, vicarious, and anticipated strain: An exploratory study focusing on physical victimization and delinquency. *Justice Quarterly*, 19, 603-632.
 Agnew, R., Brezina, T., Wright J. P., & Cullen, F. T. (2002). Strain, personality traits, and delinquency: Extending general strain theory. *Criminology*, 40, 43-72.
 Agnew, R., & White, H. R. (1992). An empirical test of general strain theory. *Criminology*, 30, 475-499.
 Brezina, T. (1996). Adaptation to strain: An examination of delinquent coping responses. *Criminology*, 34, 39-60.
 Broidy, L. M. (2001). A test of general strain theory. *Criminology*, 39, 9-36.
 Broidy, L. M. & Agnew, R. (1997). Gender and crime: A general strain theory perspective. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, 34, 275-306.
 Capowich, G. E., Mazerolle, P. & Piquero, A. (1998). General strain theory, situational anger, and social networks: An assessment of conditioning influences. *Journal of Criminal Justice*, 29, 1445-1461.
 Cheung, C., Ngai, N., Ngai, S. S. (2007). Family strain and adolescent delinquency in two chinese cities, Guangzhou and Hong Kong. *Journal of Child and Family Studies*, 16, 626-641.
 Drapela, L. A. (2006). The effect of negative emotion on licit and illicit drug use among high school dropouts: An empirical test of general strain theory. *Journal of Youth and Adolescence*, 35, 755-770.
 Froggio, G. (2007). Strain and juvenile delinquency: A critical review of Agnew's general strain theory. *Journal of Loss and Trauma*, 12, 383-418.
 Froggio, G., Agnew, R. (2007). The relationship between crime and 'objective' versus 'subjective' strains. *Journal of Criminal Justice*, 35, 81-87.
 古屋 健・音山若穂 (1999). HRMのための尺度・チェックリスト 2. 従業員用尺度・チェックリスト (8) ストレス, 日本労働研究機構調査研究報告書 No.124 雇用管理業務支援のための尺度・チェックリストの開発—HRM (Human resource management) チェックリスト— (p. 102-203). 東京: 日本労働研究機構.
 古屋 健・音山若穂 (2002). 小・中・高校生の心理的ストレス反応の構造について. 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 51, 303-323.
 古屋 健・音山若穂・坂田成輝 (2008). 高校生の心理的スト

- レス過程に関する研究：III. 身体反応と問題行動. 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 57, 151-168.
- 古屋 健・坂田成輝・音山若穂 (1997). 心理的ストレス・モデルに基づくストレスラーの分析：理論的意義と教育実習ストレスラーの実証的検討. 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 46, 461-479.
- 古屋 健・佐々木悠・音山若穂・坂田成輝 (2007). 高校生の心理的ストレス過程に関する研究：II. 心理社会的ストレスラーの分析. 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 56, 279-298.
- 群馬県(2001). わがまちのたからもの—第4回ぐんま青少年基本調査報告書—.
- Hay, C., & Evans, M. M. (2006). Violent victimization and involvement in delinquency: Examining predictions from general strain theory. *Journal of Criminal Justice*, 34, 261-274.
- Hinduja, S. (2007). Work place violence and negative affective responses: A test of Agnew's general strain theory. *Journal of Criminal Justice*, 35, 657-666.
- Hoffmann, J. P. & Ireland, T. O. S. (2004). Strain and opportunity structure. *Journal of Quantitative Criminology*, 20, 263-292.
- Hoffmann, J. P., & Miller, A. S. (1998). A latent variable analysis of general strain theory. *Journal of Quantitative Criminology*, 14, 83-110.
- Jang, S. J. & Johnson, B. R. (2003). Strain, negative emotions, and deviant coping among African Americans: A test of general strain theory. *Journal of Quantitative Criminology*, 19, 79-105.
- Langton, L., & Piquero, N. L. (2007). Can general strain theory explain white-collar crime? A preliminary investigation of the relationship between strain and select white-collar offenses. *Journal of Criminal Justice*, 35, 1-15.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing.
- Mazerolle, P., Burton, V. S., Jr., Cullen, F. T., Evans, T. D., & Payne, G. L. (2000). Strain, anger, and delinquent adaptations: Specifying general strain theory. *Journal of Criminal Justice*, 28, 89-101.
- Mazerolle, P. & Piquero, A. (1998). Linking exposure to strain with anger: An investigation of deviant adaptations. *Journal of Criminal Justice*, 26, 195-211.
- 前田雅秀(2000). 少年犯罪：統計からみたその実像. 東京大学出版会.
- Merton, R. K. (1968). *Social theory and social structure*. New York: Free Press.
- 文部科学省(2004). 児童生徒の問題行動対策重点プログラム (最終まとめ).
- 文部科学省 (2005). 新・児童生徒の問題行動対策重点プログラム (中間まとめ).
- 内閣府 (2007). 青少年の現状と施策 (平成19年度版青少年白書).
- 新名理恵(1994). 心理的ストレス反応の測定. *Clinical Neuroscience*, 12, 530-533.
- 新名理恵・坂田成輝・矢富直美・本間 昭 (1990). 心理的ストレス反応尺度の開発. *心身医学*, 30, 29-38.
- 小笠原喜康 (2005). 議論のウソ. 講談社.
- 音山若穂・古屋 健・坂田成輝 (2006). 高校生の心理的ストレス過程に関する研究：I. 情動ストレス反応の構造. 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 55, 243-256.
- 大村英昭・宝月 誠 (1979). 逸脱の社会学：烙印の構図とアノミー. 新曜社.
- Sigfusdottir, I. D., Asgeirsdottir, B. B., Gudjonsson, G. H., & Sigurdsson, F. (2008). A model of sexual abuse's effects on suicidal behavior and delinquency: The Role of emotions as mediating factors. *Journal of Youth and Adolescence*, 37, 699-712.
- Wheaton, B. (1996). The domains and boundaries of stress concept. in H. B. Kaplan (ed.), *Psychosocial stress: Perspectives on structure, theory, life-course, and method*. (p.29-70). San Diego: Academic Press.